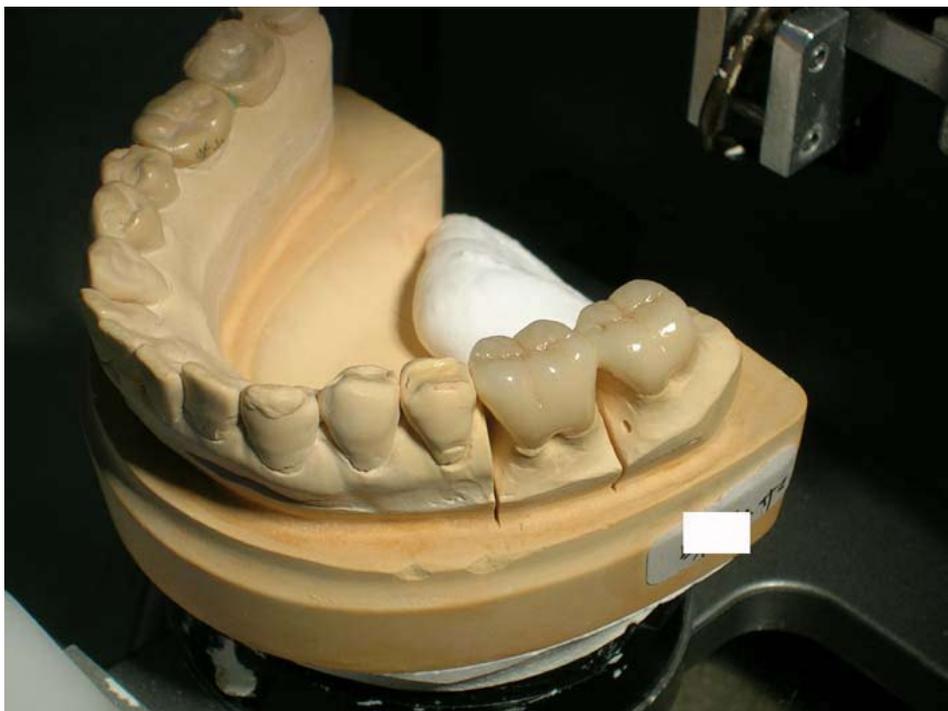


Clinical Case # 2

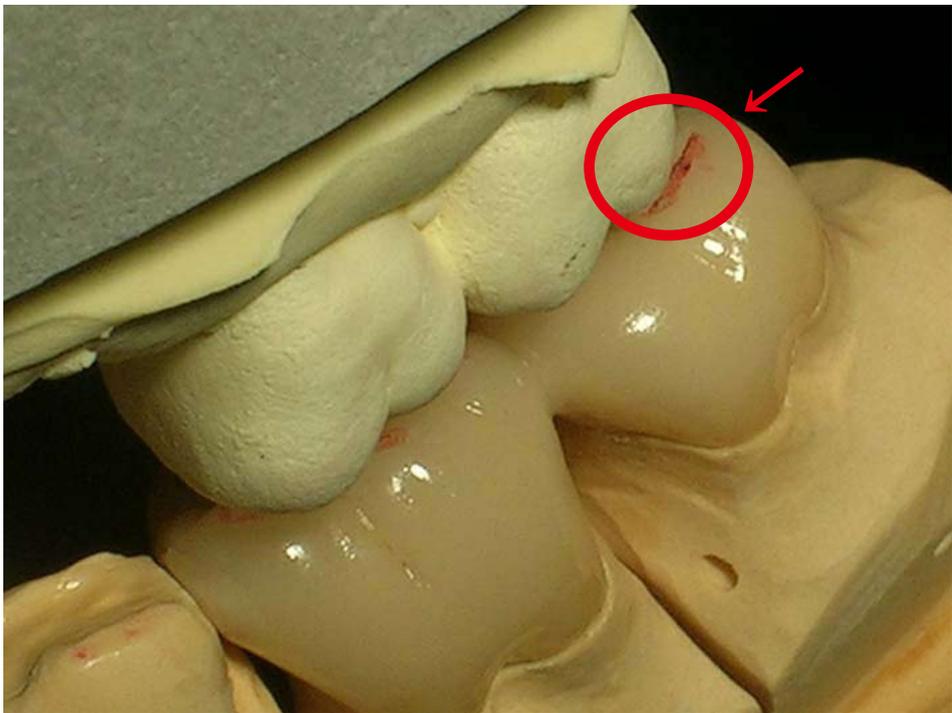


ラボから送られてきた石膏模型はそのまま医院の BGN 咬合器にトランスファーできる。
テクニシヤンの息吹が直接感じられるようだ。

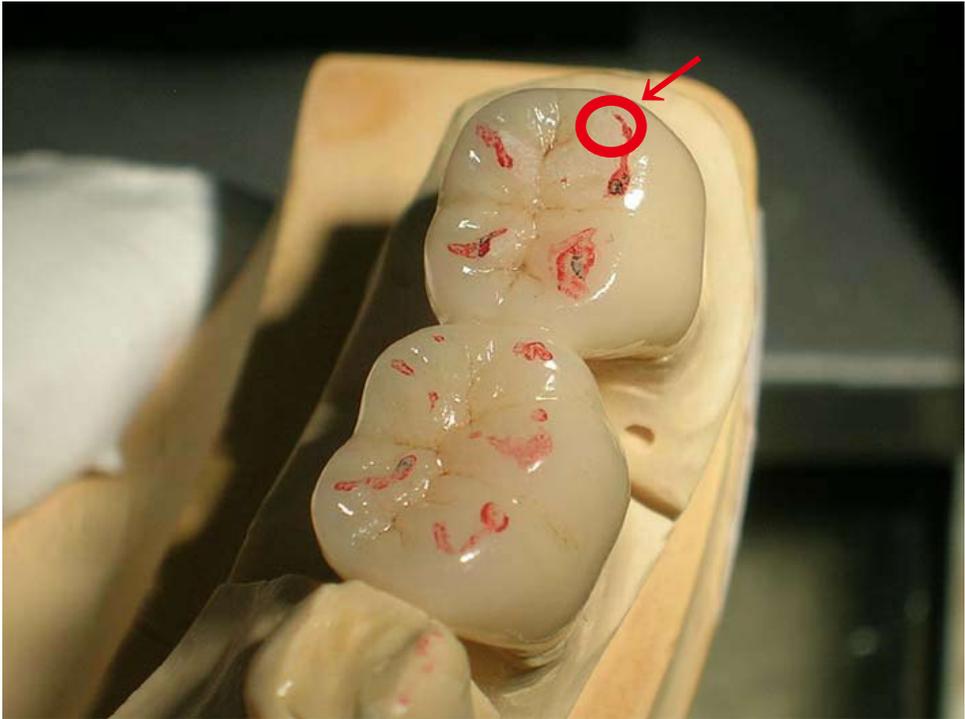
現在は、院内ラボが姿を消し
外注技工が大半を占めるようになった。
テクニシヤンが見たこと・考えたことが
使用する咬合器を共通化することにより
ドクターにも伝わってくる。



中心位での咬合状態



側方運動では、非作業時接触が見られる。



過高部が中心位から遠心に向かって見られる（丸印）
思い切って削合のこと。
青マークは中心位での咬合接触点。
ここの削合は慎重に。

この症例では、口腔内での咬合紙チェックは
全く行なわなかった。
咬合器上の咬合チェックは
正確・簡便・確実である。

調整するたびに口腔内に試適して
自然感を尋ねた。
挿入されるたびに、自然感を増していく技法に
患者さんは驚きの表情を見せる。



口腔内よりも咬合器上で観察をした方が
より正確に調整部位が分かる。

以前に、咬合紙の着色部位は接触点
ではなく、シャイニング・スポットこそが
本当の接触点だと教えられたことがある。
しかし、その見分けは簡単明瞭ではない。

咬合器上で接触点を直視して
その運動方向を見ることは重要である。

バイト・マテリアルによる
穿孔点のチェックは参考になる。